様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：８４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１３３６２

研究課題名（和文）中国の王朝交替期における絵画動向をめぐって―宋代以後の遺民画家の作例を中心に

研究課題名（英文）A study of painting trends in China during the period of dynastic alternation - Focusing on works by the painters adhering to former overthrown dynasty after Song dynasty

研究代表者
森橋　なつみ（Morihashi, Natsumi）

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部調査・国際連携室・研究員

研究者番号：２０７９５２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国の王朝交代期に現れる遺民画家の作例に注目し、絵画と遺民意識の関連性について検討するため、南宋末以降の絵画作品を中心として考察を行なった。遺民とは、前朝の主君への忠義のために新しい朝廷に出仕しない、儒教的倫理観に基づく態度をとった人々であり、そのうちの絵筆をとって胸中を吐露した者たちを遺民画家と呼ぶ。ここでは南宋末元初の代表的な遺民画家である鄭思肖とキョウ（龍＋共）開の二人を取り上げ、水墨を主体とした彼らの画風の特色に遺民意識の反映があることを指摘するとともに、後代の王朝交代期にも彼らの作品が再評価される様子を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「遺民画家」という特定の時代と環境に限定してあらわれる制作主体の研究は、体系化がしにくく、必ずしも積極的には行われてこなかったが、今回、宋末元初の2人の遺民画家に焦点をあて、比較作例を集めて相対化しながら考察をすることで、その特質が随分と明確になったように思われる。「遺民」という現象は東アジアの儒教的倫理観のなかで、国や時代を越えて共鳴を生むものであり、絵画史だけではなく社会史、文学史など人文学にひろく応用できるものである。本研究はきわめて学際的な主題であり、問題の共有化と多角的研究によって美術史研究発展の一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study will focus on the works of the painters adhering to former overthrown dynasty ("Yimin") that appear during the period of dynastic change in China, in order to examine the relationship between paintings and consciousness as the Yimin, we focused on paintings from the end of the Southern Song dynasty onward.
The "Yimin" were those who did not serve in the new court out of loyalty to their former lord and based on Confucian ethics, and those who took up a paintbrush to express their feelings were called Yimin painters. Here, we focused on two representative Yimin painters of the late Southern Song and early Yuan periods, Zheng Sixiao and Gong Kai. This study also pointed out that the characteristics of their painting style, which was mainly ink painting, reflected their consciousness as a "Yimin", and also confirmed that their works were reevaluated during the dynastic changes of later generations.

研究分野：中国絵画史

キーワード：中国絵画　遺民画家　宋末元初

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究の開始当時、南宋末元初に活躍した顔輝の「蝦蟆鉄拐図」（京都・知恩寺蔵）の主題について、絵画表象に同時代の知識人の遺民意識が投影されているという観点から考察を続けていた。顔輝は廬陵（江西省吉安県）地域を中心として活動した画家であり、同時代、ここには愛国詩人として名高い劉辰翁や子息の劉将孫ら宋の遺民が多くいた。また、廬陵地域は南宋末の義臣として名高い文天祥の出自である吉水を含むことからも、強い遺民意識もつという場のコンテクストを持っている。さらに、南宋末の荘肅（『画継補遺』下）や劉将孫（「吉州路永和重修輔順新宮記」『養吾斎集』巻十七）に言及される、士大夫からの顔輝への高い評価について関心をもち、これが研究の起点となった。顔輝の基準作である「蝦蟆鉄拐図」の考察をとおして、対幅として描かれた二人の仙人像が、いずれも披髪・跣足・襤褸という“謫仙（天界から現世に流謫された仙人）”を示す姿であらわされることから、「本来性の喪失」という点で共通性をもち、亡国の遺民の心性に重なるものであると試論を提出した。

この考察から、顔輝の絵画表象に鑑賞層である知識人の遺民意識が投影されているという見解は強くしたものの、顔輝は基準となる作例が乏しく、また宋末元初の廬陵地域で活躍した他の画家の作品が伝存しないため、場の問題に根ざした比較検証がきわめて困難であった。さらに、伝記資料もわずかで、顔輝の交友関係や顔輝自身が遺民か否かなど、人物像や活動は不明な部分が多く、結論を留保せざるをえない状況であった。そこで、顔輝と廬陵地域という個人と地域に定点をもちながら、新たな観点として、同時代の龔開や鄭思肖に代表される遺民画家（画家自身が「遺民」として過ごし、遺民意識を表明した絵画を制作しているもの）のありように照らして問題を相対化すべく本研究を着想した。また、現存作例が少ない宋末元初の事例に限定せず、明末清初などの複数の王朝交替期の事例を比較対象として、より体系的に遺民と絵画の関係について考察するという構想に至った。

文化史や社会史において、遺民は個人にとどまらず、集団的な現象として研究が進められているが、絵画史においては宋遺民や明遺民として過ごした作家の個々の事象を整理するにとどまっている感が否めない。絵画史では、遺民画家とは社会的に仕官をせず前朝への節を持して遺民として過ごし、画業にいそしんだ者のことを通称しており、遺民としての意識を絵画やそこに添えた題跋の上に表わしているとみなされる。遺民画家同士では師承関係や流派などの関連性を見いだせるものではなく、個々人で表現が異なるため体系化が難しいように思われるが、遺民という共通意識を背景に傾向があらわれる可能性を感じ、より多くの比較作例を集めて検討することとした。

２．研究の目的

本研究では「遺民画家」という王朝交替期にあらわれる特異な事例を取り扱い、個別の作家研究にとどまらず、遺民による絵画表現を個人や時代の枠を超えて比較をおこなう。遺民による絵画は、中国絵画史上ではやや例外的な位置づけを与えられ、その実態はあいまいなままである。ここでは王朝交替期、とりわけ宋末元初と明末清初という漢民族王朝が亡失した二つの時期の絵画動向に目を向け、両者を相対化しながら、遺民と絵画について体系的な考察を行う。また、これまで研究を続けてきた顔輝と江西（廬陵）知識人のありようを一つの定点として相対化することで、画家自身が遺民であり生みだされる絵画に対して、受容者側のもつ遺民意識と絵画の関係性という見方をあわせて検証する。

遺民画家という特定の時代と環境に限定してあらわれる制作主体の研究は、絵画史だけではなく遺民という現象をとおして社会史、文学史など人文学に広く応用できるものである。この研究を通して、他分野でも重要な主題となっている遺民について、絵画史の立場からアプローチし、視覚表現としてあらわれる遺民意識のありようについて、体系的に捉えなおすことを目的としている。

３．研究の方法

現物の伝存状況から、本研究では宋末元初および明末清初の作例を主な調査対象とした。楚の屈原にまで遡ることができるように、遺民意識は中国では極めて古くから認められる精神構造であり、儒教的倫理観に根差し、時代を越えて広く共有されるものであることから、数百年を隔てた時代であっても、遺民としての意識には共通性があると考えている。また、作品研究にあたっては、筆墨や画面構成、主題選択などを分析し、どのような絵画伝統に範をとるか、類型化できるかを検討した。遺民意識を反映した絵画とは、たんに個人感情の発露としてみるべきではなく、主題はもとより表現技法においても、その精神性を表象するのに最もふさわしい手法が選択されていると想定した。

本研究の遂行にあたっては、対象作品の現物調査を中心とした。作品調査においては、運筆や作画に用いた素材がわかるような細部写真を多く集め、あわせて伝来や鑑賞者の評価、後世への

影響力を検討するために、外題や題跋、箱書きなど付属資料の情報も収集した。なお、遺民画家の作例を広く検討するものの、手当たり次第にすすめることは時間的、労力的、費用的面において困難であるため、研究開始当時に所属していた大阪市立美術館の中国書画コレクションを中核にすることとした。大阪市立美術館の所有する中国絵画資料には、遺民の絵画である龔開《駿骨図》および鄭思肖《墨蘭図》が含まれ、国際的にも広く知られた優品であるため、本研究の十分な足掛かりとなる。また、当該コレクションには八大山人や傅山など代表的な明遺民の作例も複数含まれ、明末清初の作例の検証にも有益であった。ただし、研究対象の偏りを避けるため、国内外の他館に所蔵される作例にも広く目を向けた。作品の選定にあたっては、絵画表現のほか、画家の社会的位置や活動地域、言説の傾向などできるだけ特色のある豊富な事例を選んだ。なお、研究計画の途中に新型コロナウイルス感染症の流行が生じ、実地調査ができない期間が長らくあったため、調整がつかなくなった対象については画像資料や出版物等の情報で補うこととした。

収集した資料については、「遺民」という観点から絵画作例の集積と比較分析を行うとともに、題跋や賛など絵画に付随する文字資料を精読し、それぞれの作家や絵画の特色・鑑賞者への受容の様相を検討した。なお、文字資料を精読するにあたっては、個別の伝記や作品の著録、画史画論や文学など多くの文献資料に照らし、研究会などを活用して意見を仰ぎながら正確な解釈につとめた。

４．研究成果

①宋末元初：宋遺民の絵画について

南宋末から元初に遺民として過ごした画家である龔開の《駿骨図》と鄭思肖の《墨蘭図》（いずれも大阪市立美術館蔵）について、作品調査と共に題跋など付属の文字資料を釈読した。絵画はいずれも彩色を用いない水墨であらわされ、疎筆の傾向にあり、絹本ではなく紙本に描かれる点に共通性を持つ。宋遺民である二人は前朝に出仕経験があり、職業的な専門画家ではなく、その絵画は北宋以降の文人余技的な水墨表現の延長上に置くことができるといえる。また、龔開が濃墨で異形をあらわす一方、鄭思肖が淡墨で瀟洒な花卉をあらわす点では、両者は対照的であるが、題跋や伝記類をたどれば、いずれも亡国の憂き目に遭ったことによる義憤や鬱屈とした思いが作品に重ねられていると鑑賞者（知識人、文人）に受け止められていた。両作品の題跋や付属の文字資料に関しては、『関西九館　中国書画録Ⅲ』（関西中国書画コレクション研究会成果報告書、2018 年 3 月）に発表している。

後世への影響を考える時、鄭思肖の場合、屈原の忠義に感銘を受け、屈原の愛した蘭を水墨で繰り返し描き、根を下ろすべき国土が奪われたとして無根の蘭に表したが、絵画的特色としては伝統的な花卉図の範疇を越えなかったため、後世の画家の墨蘭図制作にしばしば引用された。蘭は四君子の一つに数えられ、花卉画のなかでも比較的多く描かれる主題であり、その表現のヴァリエーションとして、鄭思肖風の蘭が定着したようである。ただし、無根であるか否かはさほど意識されておらず、“墨蘭”であることに力点があるようで、たとえば清朝中期の鄭板橋が多数制作した有根の墨蘭図など、題詩や款記のなかで鄭思肖に言及する作例が多く見受けられた。

一方の龔開は、《駿骨図》のほかに《中山出遊図》（米国・フリーア美術館蔵）という鐘馗が鬼を連れて嫁ぐ妹を送る行列を描いた作品が残されているが、これもやはり水墨のみで紙本にあらわされ、疎筆である。龔開の画は南宋期の禅宗画とのかかわりが指摘されるものの、濃墨を多用した諧謔味の強い表現は個性が強く、わずかに同時代の画家である顔輝に類品が伝わるだけで、後世の画家による引用は非常に限定的である。龔開の画は、存命中ないし没後間もない元時代初期には比較的高い評価を得たが、世代が少し離れるとすぐに評価を落としている。しかしながら王朝交替期には再評価されるという事を繰り返した。鄭思肖と龔開についての考察は、「鄭思肖《墨蘭図》について」（『大阪市立美術館紀要』18、2018 年 3 月）、美術史学会西支部例会「龔開の制作とその受容について　―大阪市立美術館蔵「駿骨図」を中心として」（2021 年 1 月 23 日）、京都国立博物館夏期講座「亡国と美術―宋遺民の絵画をめぐって」（2022 年 8 月 6 日）などで発表した。

このほか、宋末元初の画家として、道釈画家の顔輝、禅僧画家の牧谿、遺民画家とされる銭選などの制作についても検討した。とりわけ龔開と鄭思肖と同時代に杭州で活躍した牧谿について、水墨表現の特質を中心に検討した。牧谿は中世日本に将来されて以降日本で絶大な評価を受けてきており、先行研究も多いが、牧谿の活動実態については不明なことも多い。ここでは牧谿の水墨表現と遺民画家たち画風の親近性について着目し、宋末元初という時代相や南宋故地の杭州周辺で行われた絵画動向を探った。牧谿については「牧谿の絵画と日本」（『淡交』2022 年 10 月号）、サンフランシスコ・アジア美術館招待講演「The Chinese Painter Muqi in Japanese Culture（牧谿と日本文化）」（2023 年 11 月 17 日）のなかで言及した。

②明末清初：明遺民の絵画について

明末から清初に遺民として過ごした画家の作例は、宋末元初に比べて現存数も多く、多様である。しかし画題の中心は山水であり、水墨ないし水墨を主体とした淡彩を用いるものが主流となる傾向があり、支持体は絹もあるが紙本が多く、余白を活かした清浄な画面制作が目指されていた。また、無根蘭や駿骨（痩馬）といった記号的な主題が繰り返されるのではなく、山水を主体として筆墨が洗練され、絵画表現として深化している点は宋遺民の表現と一線を画している。具体的には八大山人や石濤など遺民画家として評価や影響力の大きかった画家を中心として作品調査や考察を進めた。作品評価においては、作家の遺民としての忠義や人品が讃えられ、世俗を離れた隠逸の理想を追求していると解釈されるものが多くみられた。なお、清初よりやや時代は下るが、八大山人や石濤などの後継として活躍した、清朝中期の揚州八怪とよばれる書画家たちの作品に鄭思肖や龔開が引用されていた。すなわち鄭板橋による《墨蘭図》（上海博物館蔵）、華嵒による《痩馬図》（台北・国立故宮博物院蔵）、そして羅聘の《鬼趣図》である。このうち羅聘は、幽霊など異界の存在を描く鬼趣図について、その淵源に龔開の絵画の存在があることを画賛等で言及している。これらの清初の遺民画家と揚州八怪に関しては、主担当した『特別展　揚州八怪』図録（大阪市立美術館、2021 年 6 月）や、「日本における揚州八怪の作品理解について」『国際シンポジウム報告書　中国書画コレクションの時空』（関西中国書画コレクション研究会、2022 年 3 月）にまとめた。

本研究は王朝交替期という特殊な時期において、前朝に忠義をとった宋遺民の画家に着目し、とくに代表的画家と目される鄭思肖と龔開の作例を基点において絵画表現上の特色を明らかにすることを目的とした。両画家は色を賦さず、水墨のみを疎筆で用いる点で共通するものの、鄭思肖が文人余技の瀟洒な花卉画の範疇にある一方、龔開は黒々とした濃墨や渇筆を多用して奇怪な異形をあらわして伝統的表現に一線を画した。彼らの画風が一家を成して画壇を席巻することは無かったが、王朝交代期に再浮上してくる点は、「遺民」という漢人文化のイデオロギーを象徴する記号として、とくに文人画家や知識人の鑑賞層のなかで機能していたことを確認できた。また、元末明初よりも明末清初の遺民たちに親和性が高く、石濤や八大山人に代表される画家、やや時期を経て康雍乾三帝期に活躍した揚州八怪の作例中にモチーフとして継承され、一つの主題として発展していく様相を辿ることができた。本研究の最終的な目標である遺民画家の体系的理解に向けては不足も多く十分な結論とは言えないが、大きな方向性を見つけ、今後の考察を重ねていく上で格子となる、基礎的な整理ができたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 森橋なつみ・岡岩太郎共著	４．巻 45
２．論文標題 修理報告 重要文化財 紙本墨画遠浦帰帆図 伝牧谿筆	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都国立博物館 學叢	６．最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 1539号
２．論文標題 清・李方膺画 墨梅図冊	５．発行年 2024年
３．雑誌名 國華	６．最初と最後の頁 43-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 0
２．論文標題 茶の美術としての中国絵画	５．発行年 2022年
３．雑誌名 特別展「京に生きる文化　茶の湯」展覧会図録	６．最初と最後の頁 286-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 76
２．論文標題 牧谿の絵画と日本	５．発行年 2022年
３．雑誌名 淡交	６．最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森橋なつみ	4．巻 -
2．論文標題 日本における揚州八怪の作品理解について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『国際シンポジウム報告書　中国書画コレクションの時空』	6．最初と最後の頁 193-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森橋なつみ	4．巻 -
2．論文標題 董其昌在日本的接受情況	5．発行年 2019年
3．雑誌名 丹青寶筏 董其昌書画芸術国際研討会論文稿	6．最初と最後の頁 758-763
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森橋なつみ	4．巻 －
2．論文標題 大阪市立美術館収蔵の阿部コレクション	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際シンポジウム報告書：阿部コレクションの諸相―文化的意義とその未来	6．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森橋なつみ	4．巻 19
2．論文標題 爽籟館主人・阿部房次郎の中国書画蒐集について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大阪市立美術館紀要	6．最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 313
２．論文標題 阿部房次郎與中国書畫	５．発行年 2018年
３．雑誌名 典藏（古美術）	６．最初と最後の頁 92-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 314
２．論文標題 阿部房次郎藏画精品ケツ英	５．発行年 2018年
３．雑誌名 書与画	６．最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 18
２．論文標題 鄭思肖「墨蘭図」について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大阪市立美術館紀要	６．最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 弓野隆之・森橋なつみ	４．巻 3
２．論文標題 駿骨圖　キョウ開筆	５．発行年 2018年
３．雑誌名 関西九館所蔵　中国書画録Ⅲ	６．最初と最後の頁 77-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森橋なつみ	４．巻 3
２．論文標題 蘭図　鄭思肖筆	５．発行年 2018年
３．雑誌名 関西九館所蔵　中国書画録III	６．最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 The Chinese Painter Muqi in Japanese Culture
３．学会等名 Lecture in the Asian Art Museum of San Francisco（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 亡国と美術ー宋遺民の絵画をめぐって
３．学会等名 令和４年度京都国立博物館 夏期講座
４．発表年 2022年

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 日本の茶文化における中国絵画受容
３．学会等名 特別展「京に生きる文化　茶の湯」記念講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 “揚州八怪”の作品をめぐる諸問題
３．学会等名 関西中国書画コレクション研究会設立10周年記念　国際シンポジウム 「中国書画コレクションの時空」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 キョウ開の制作とその受容について ―大阪市立美術館蔵「駿骨図」を中心として
３．学会等名 美術史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 森橋なつみ
２．発表標題 董其昌在日本的接受情況
３．学会等名 丹青寶筏 董其昌書画芸術国際研討会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 板倉 聖哲、塚本 麿充、森橋なつみ他	４．発行年 2021年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 712
３．書名 アジア仏教美術論集　東アジア　Ⅲ	

１．著者名 森橋なつみ他	４．発行年 2020年
２．出版社 醍醐書房	５．総ページ数 145
３．書名 美術フォーラム21 42特集｜コレクターの眼差し－モノの向こうに何を見るか	

１．著者名 森橋なつみ編	４．発行年 2019年
２．出版社 大阪市立美術館	５．総ページ数 184
３．書名 国際シンポジウム報告書：阿部コレクションの諸相―文化的意義とその未来	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関